

昭和の南海地震体験談

氏名:原崎 眞二(はらさき しんじ)
生年月日:昭和13年3月30日
地震を体験した場所:田辺市
当時の家族状況:父、母、兄3人、姉1人、妹1人



1) 地震発生時の状況

当時8歳、飛び起きて表に出た、父は、警防団で火事の注意に、家を出た。

次男は役場の宿直で留守、揺れが収まって、母に家に入るように言われるが、前の家の小父さんが「津波だ！逃げろ！」と叫んでいたのので、シャツ姿で線路の向こうの道まで走ったが、水が膝まで来た、子供の頃から遊んでいた、山への上り口に行き、山に入った。寒くて、最初、誰も居なくて山を歩いていたら、他にも避難して来た人が居たことは、覚えている。

2) 津波襲来時の状況

津波に追いかけて逃げた記憶のみ。暗くて、全く見えず、音も覚えていない。

3) 家族の行動・被害

家族バラバラという印象持っている、(長男、母、末妹は、腰まで濡れて鉄道線路へ避難して無事、長女は線路に向かうが上り口がわからず、線路の下を越して山経由で鉄道線路に避難して無事、)かなり時間たって、「降りよう」と、山で一緒になった人と線路に行くが、道は“ドロドロ”、“ベッタベタ”、味噌糞一緒、山越えて線路へ。

(戻ってくるのが遅い私と、次の弟を、線路に居た家族達は、「眞二ら、どこに逃げたのか」、「もう死んだ」と、あきらめられていたらしい。)

4) 集落・周囲の被害

線路に行くと、近所の48歳の小母さんが裸で、腹膨らまして死んでいて、家族が水を吐かせると腹を押していたのは印象的だった。

5) 地震・津波後の生活

その日のうちに、山奥の親戚の家に疎開した。

地震・津波の前は、家の前の学校にラクに通っていたが、疎開先からは、毎日30分以上かけて通学した。

6) 次の災害への備え

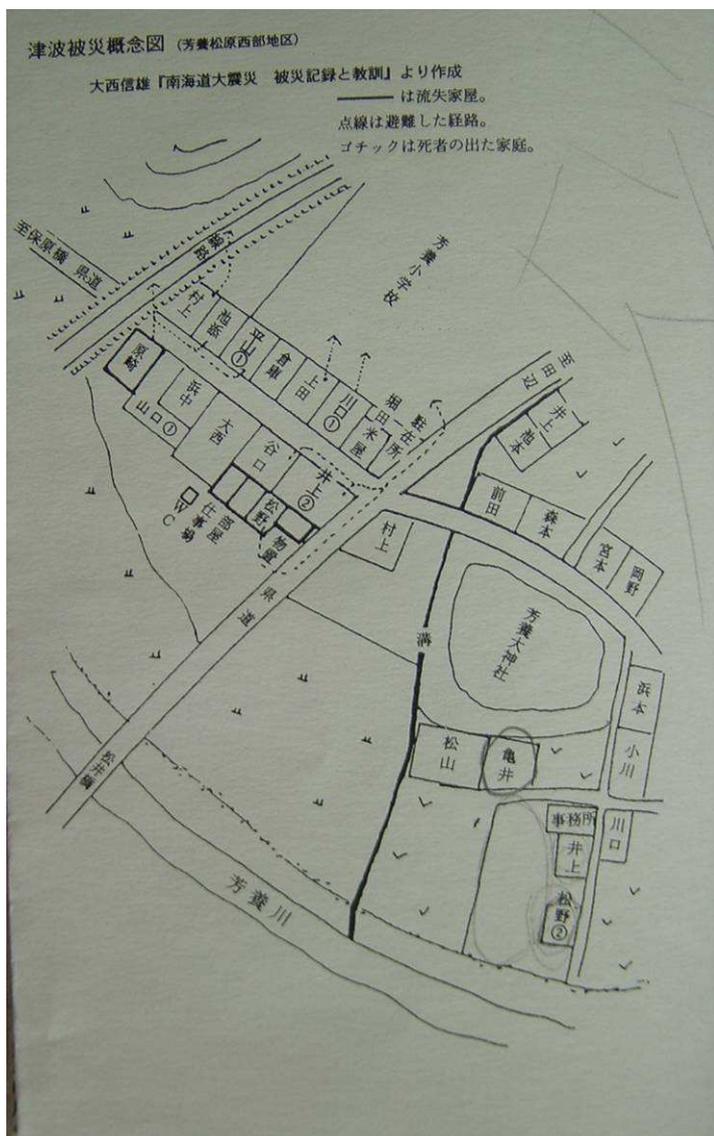
防災活動には参加している。

枕元に明日着る服を置いて寝たら、真っ暗でも慌てず着ることが出来る、本当に山の上で、何時間も寒くて震えていたので、つくづくそう思った。

7) その他

中学卒業と同時に、都会に行ったので、10年ぐらい前に、50数年ぶりに戻った。

父は昭和21年に死亡。家を再建したので、引き継いだ長男が、一番苦労した。



津波被災概念図

大西 信雄氏

「南海道大震災被災記録と教訓」
より掲載

左上、線路前の原崎家
基礎石残して流出